

「竹取物語」から始まつて、平安時代にはすぐれた物語がたくさん生まれたが（『E』一六六）、一方では、史実を材料としてこれを物語化しようとする傾向が現れてきた。これが「歴史物語」というジャンルだ。

また、鎌倉・室町時代には、貴族文化が衰え、新興勢力の武士が台頭（たいとう）してきて、新しく「軍記物語」を生むことになる。

榮花物語——宇多天皇から堀河天皇までの十五代、約二百年間の歴史を記す。『源氏物語』の影響が大きい。『源氏物語』が光源氏を主人公にしたように、ここでは藤原道長の榮華を中心に描いているが、批判性がなく道長賛美に終始している。編年体（年月順に記事を配列）の記述。

（以下は「四鏡」と言われるもの）

大鏡——大宅世継（一九〇歳）が夏山繁樹（一八〇歳）を相手に昔を語り、若侍が批評の言葉をはさむのを、作者が筆録するという形式。歴史上の人物の特徴があざやかで、批判精神もある。紀伝体（特定人物中心の記事と帝王の系譜）の記述。

今鏡——大宅世継の孫娘が物語る形式。単調。

水鏡——『大鏡』を補う意味で叙述。平淡。  
増鏡——史実は正確。優雅な擬古文で書かれ、『大鏡』に次ぐ佳作である。

平将門の乱が漢文体で記されている。

陸奥話記——前九年の役の合戦の記録

保元物語——保元の乱を物語化したもの。源為朝

を中心扱っている。

平治物語——保元物語の姉妹編。平治の乱を扱

源義朝の子、悪源太義平が中心

平家物語——平家一門の台頭から繁栄、没落までの

ことを、「諸行無常・盛者必衰」の無常觀によつて、いさよとく

て描いている。「平曲」として琵琶法師が語り広め

た。中世文学の傑作である。

源平盛衰記——平家物語——を加除補筆したもの。

源氏方の話を多く取り入れている。文章は昔漫

太平記——半世紀に及ぶ南北朝の争乱が題材。鎌倉

な和清混交で、拙半精裡にも富んでいる。衣名

二よつて講釈せしむ。

「ことば言物語ことば。十言物語うしご。一といも。原義よしづね経の

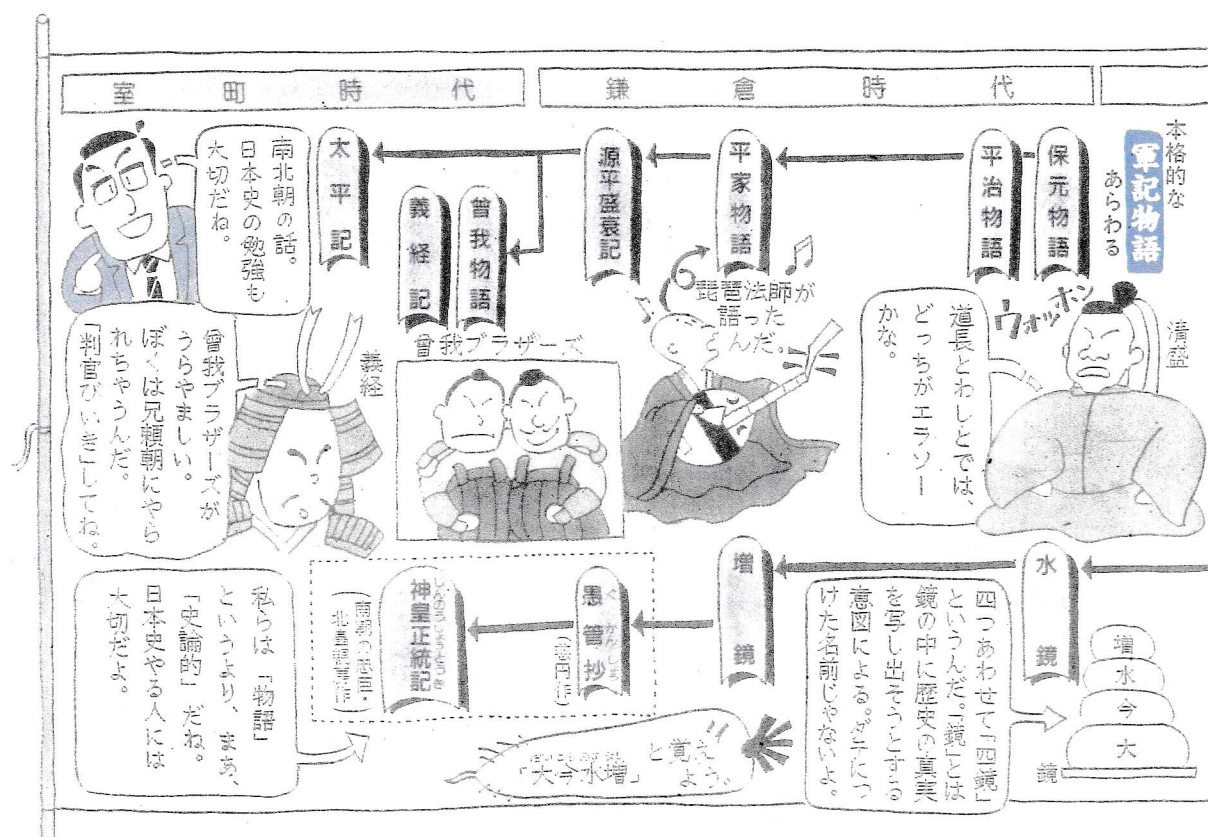
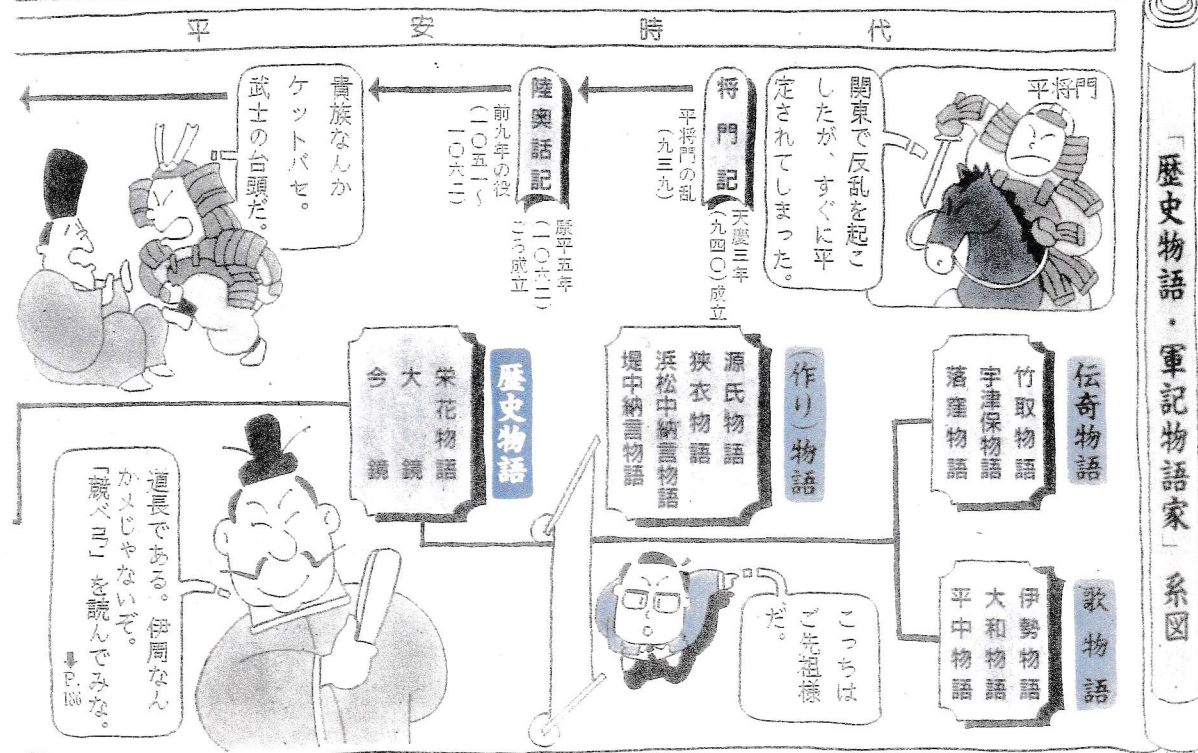
主、立ちから末路までを悲劇的、同情的に描く。

曾我物語——曾我五郎・十郎の兄弟が、父の仇、工

藤祐経を討ち果たし、最後は切られてはなばなし

く散るという話。

(ご先祖様がエラかった！)





# 祇園精舎…『平家物語』

① 祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。② 娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。③ おこれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。④ 猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

⑤ 遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、これらは皆旧主先皇の政にも従はず、樂しみをきはめ、諫めをも思ひ入れず、天下の乱れんことを悟らずして、民間の憂ふる所を知らざつしかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。⑥ 近く本朝をうかがふに、承平の将門、天慶の純友、唐和の義親、平治の信頼、これらはおこれる心も猛きことも、皆とりどりにこそありしかども、まぢかくは、六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申しし人のありさま、伝へ

## 現代語訳

① 祇園精舎の鐘の音には、万物が無常であるということをおぼせる響きがある。② 娑羅双樹の花の色は、盛んな者も必ず衰えるという道理を表している。③ 権勢をほしいままにしている人も(その栄華は)長く続かない、まるで春の夜の夢のようだ。④ 勇猛な者も結局は滅んでしまふ、まったく風の前の塵と同じだ。

⑤ 遠く外国(に例)を探してみると、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の安禄山、これらは皆もとの主君や前の皇帝の政治にも従わず、樂しみを極め、忠言をも深く考えに入れようとせず、天下が乱れることを悟らずに、人民の苦しみを知らなかったたので(栄華が)長続きせずに、滅びてしまった者たちである。⑥ 近く我が国(に例)を調べてみると、承平年間の平将門、天慶年間の藤原純友、唐和年間の源義親、平治年間の藤原信頼、これらはおこりたかぶっている心も勇猛なことも、皆それぞれであつたけれども、ごく最近では、六波羅の入道前の太政大臣平朝臣清盛公と申した人のありさまを、

承るこそ、心もことばも及ばね。

## 注

- \* 祇園精舎 昔、中インド舎衛国の林園に、釈迦のために建てられた寺。
- \* 娑羅双樹 釈迦が死の床に伏していた時、床の四方に二本ずつ生えていたという樹。釈迦が死去すると、白色に変じたとされる。
- \* 異朝・本朝 「異朝」は外国のこと。当時「外国」といえば、中国を指す。対して「本朝」は日本のこと。
- \* 六波羅 今の京都市東山区六波羅蜜寺の付近。平清盛の邸宅があつた。

## 出典 解説 平家物語

鎌倉時代前期の軍記物語。信濃前司行長の作と伝えられている。平家の全盛期から平清盛の死後、衰退して部落ちし、各地での合戦にこごとく敗れて壇の浦で滅亡するまでの興亡史と、その後日談を記す。人の世のはかなさ、滅びゆくものの美しさが、仏教的無常観を背景にして描き出されている。琵琶法師によって、琵琶の伴奏に合わせて「平曲」として語り伝えられた。

## 試験のポイント

- ① 諸行無常 「万物は絶えず変化し生滅してとどまることがない」という、仏教の根本思想。
- ② 理 「ことわり」と読む。「道理」という意味の名詞。
- ③ ただのごとし ひとへに同じ 比喩を表し、「まるでこのようだ」「まったく同じだ」という意味。
- ⑤ とぶらへば 「とぶらふ」は「探す・尋ねる」という意味の

## 動詞

- ⑤ 亡じにし サ変動詞「亡ず」の連用形「亡じ」+完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」+過去の助動詞「き」の連体形「し」。
- ⑥ 及ばね 平行四段動詞「及ぶ」の未然形「及ば」+可能の助動詞「る」の未然形「れ」+打消の助動詞「ず」の已然形「ね」。已然形「ね」は、上にある係助詞「こそ」と係り結びが成立している。



▲ 娑羅双樹

伝え聞き申し上げるのは、(そのおこりを極めて横暴な様子は)想像もつかず言葉で表現することでもできない。

## ひびく 鑑賞

哀感をたたえた格調高い調べで有名な重頭文です。仏教的な因果応報の思想と無常観がよく表れていると同時に、七五調や対句によつて印象的な文体となっていますね。